

第二部 第一話 清七とんまつり

むかしむかし  
昔々のことやった。

北潟の西に、「清七とん」というおんさんが、住んどったそうな。清七とんの仕事は、木を切ることやっ

たんやと。ある年の十二月九日、清七とんは、いつものように

山へ木を切りに行つたんや。大きながんど（のこぎり）で、木をズイコ、

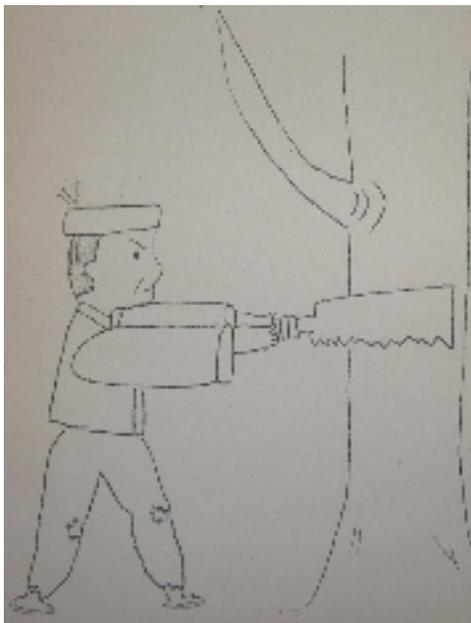
ズイコと切つておつたそうな。

その時、とつぜん大きな音がして、目の前がまつくらになつて

しまったんやと。清七とんは、そりやびくりした。それで、おそる

おそる見上げてみたんや。すると、そこには、今まで見たことも、

聞いたこともないような、大きな大きな天狗様が、立っていたんやと。清七とんは、腰を抜かしてしも



うた。

てんぐさま  
天狗様は、真つ赤な顔をしていて、鼻は長く、目はぎよろりとしていたそう。清七とんが、そのまま  
みあげていると、天狗様は、大きな低い声で、  
清七とんに向かつてどなりつけたんや。

「こらー、何しとる。」

それから、こう続けたんや

「今日は、何の日じゃと思。山の祭りの日じゃぞ。」

それなのに、山に入って木を切るとは……。とって食うて

しまうぞ。」

とな。清七とんは、ブルブル震えながら、

「どうか、ゆるしてください。おねげいたします。」

と、手を合わせて、拝むやら、祈るやら、地面に頭をつけて、もう、必死にお願いしたそう。そう



したら、どうしたんかのう。清七とんが、あんまりあやまるので、かわいそうに思っただんかのう、天狗様は、  
こう言っただんやと。

「よし、今度だけは助けてやる。しかし、来年からは、十二月九日に山に入るな。それ  
れから、そのことを庄屋にも伝えておけ、いいな。……。」  
て、いうように。

それから、清七とんは、着物のうなじ（えり首）をつかまれ、空高く、”ブーン”と、ほうり投げられ  
たんや。

それから、何どきたったことか。ふと気がつくと、清七とんは、庄屋様の家の前に大の字  
になって、寝ていたんや。しばらく、清七とんは、山で出合った天狗様のことを思い出せず、つかれたな  
と思っただんや、そのまま寝てしまった。

夜になって、冷たい風が、”ピュー、ピュー、”と、吹きはじめると、思い出したんや、天狗様のこ  
とを。思っただんや、”ゾー”とした清七とんは、いちもくさんに、庄屋様の家へとびこんだんやと。そして、

しょうやさま てんぐさま はなし  
庄屋様に天狗様の話をすると、庄屋様はびっくりして、

「じゅうにがつこのか  
十二月九日には、山へ入るべからず。」

という、立て札を立てたそうなの。

そして、それから、じゅうにがつこのかやままつ  
十一月九日の山祭りの

ことを『清七とんまつり』と言っておるそうなの。